

本年度の具体的な学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的な方策(教育活動)	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合評価	本年度の課題と次年度への方策	総合評価
1 個に応じた多様な学習指導とキャリア教育計画に基づく進路指導	総務課	・国際感覚を養うグローバル活動「グローバルプログラム」による国際交流機会の充実 ・姉妹校短期留学受入れを参加生徒にとってより効果的になるよう企画する。近隣6高校と連携した校内短期留学や海外研修を新規に企画して実施することで、コロナ後のグローバルプログラムの流れをつくる。 ・英語検定試験対策学習システムの構築(英語科との連携) ・英語検定試験を準会場として2回開催し、草岡セミナーを活用した対策講座やオンライン英会話を実施する。	・国際交流活動に積極的に取り組んだ生徒のべ人数(R4. 366名) 4: 400人以上 3: 350人以上 2: 300人以上 1: 300人未満	・今年度から希望者が参加する形式にした姉妹校オンライン交流には32人が参加し、カシミア通信はこれまでに2回発行した。8月に開催した英語研修「倉敷留学GLOBAL STUDEIS PROGRAM」に近隣6校に参加を呼びかけ、そのうちの2校とともに31人の申し込みがあった。コロナ後のグローバルプログラムの流れをつくる。 ・英語検定試験対策を英語科と連携して6月の草岡セミナーで実施した。第1回受験者数124名(準1級: 15名、2級: 86名 準2級: 23名)	B	・姉妹校オンライン交流32人、マックジョージ氏歓迎会18人、倉敷留学21人、姉妹校ホームステイ説明会31人(ホストファミリー15人)、姉妹校美観地区バディ42人、ケアンズ研修説明会49人(申込34人)、県バンクーバー研修6人の合計199人が参加した。さらに、姉妹校短期留学受入れの際には英語と書道の交流授業で60人のほかに、総合的な探究の時間を活用して1年次生320人がクラスごとに企画して交流した。 ・英語検定試験対策を英語科と連携して9月の草岡セミナーで実施した。第2回受験者数138名(準1級4名、2級91名 準2級43名) ・国際交流活動に積極的に取り組んだ生徒延べ人数 461名 達成基準4(交流事業199名＋英語検定受験者数124名＋138名)	A	【課題】 ・海外研修は順次再開していくことができたが、日程や費用を含めて1年後まで見通せる情報を示すことが難しかった。 【方策】 ・年間計画「グローバルプログラム」と各プログラムの詳細を早い段階で示して、海外研修や倉敷留学に関心のある生徒や保護者が安心して最適のプログラムを選択できるようにする。	A
	教務課	・新教育課程に対応した評価方法の改善を研究する。 ・教育課程のさらなる最適化・合理化の検討を進めるとともに、少人数講座、習熟度別講座の効果的な運用についての検討を進める。	学校自己評価アンケート(生徒) ①5「先生は生徒の学力が伸びるよう授業改善に努めるなど、様々な教育活動に取り組んでいる。」 肯定的評価の割合(R4生徒88%、保護者86%) 生徒 保護者 4: 95%以上 4: 90%以上 3: 90%以上 3: 85%以上 2: 80%以上 2: 75%以上 1: 80%未満 1: 75%未満	・新教育課程における観点別評価の方法について、第二回定期考査において年間を見通した改善をはかり、周知したほか、他校の状況も情報収集した。 ・次年度に向けて教育課程の変更を検討・決定・届出したほか、懸案であった年度途中の科目切り替えに関する履修認定の方法について整備した。	B	・新教育課程における観点別評価の方法について、昨年と比較して改善を図った。 ・生徒のさらなる習熟を企図して、50期3年次数学の教育課程について変更を計画している。 ・数学および理科について年度途中の履修認定のあり方を整備し、実施した。 ①5学校自己評価アンケート(R5肯定的評価) 生徒 88.3% 達成基準2 保護者 78.4% 達成基準2	B	【課題】 ・少人数講座および習熟度別講座の整備をはかる必要があるが、物理的条件を勘案しながら実現可能なものから進めていく。 ・学習評価方法変更のさらなる周知を図る必要がある。 ・成績処理についてヒューマンエラーが生じている。 【方策】 ・他の課と連携し現在の少人数講座や習熟度別講座の実態を集約し、今後の講座編成に役立てる。 ・新しい学習評価の方法について、より適切なものになるよう検討を進める。また、成績処理についてミスなくスムーズに実施できるよう手順・マニュアル等をさらに整備する。	
	進路課	・生徒個々の学習進捗に最適化された選択課題の研究を進める。また、ICT教材を有効に活用し、主体的な学びとリメディアルな学びを促進する。 ・教科全員で、3年の実力考査の問題(知識・理解、思考・判断、知識の活用力を測る)の作成と分析(難易、到達度、校外模試との相関など)を行い、学力を高い精度で評価できる指標を作成する。そのために大学入試問題研究や、予備校主催の入試研究会への参加を促し、作問分析や参加後の情報共有など、年間6回以上の教科会議を行い、教科指導力の向上を目指す。 ・個々の生徒の進路実現を支援するために3年間を見通した進路指導計画や進路指導プログラムに基づいたLHRや総合的な探究の時間、面談などを通して、きめ細かい進路指導を行う。 ・最新の進路情報の提供を行い、生徒・保護者双方の進路意識を高めるために各年次進路だよりの配布や保護者会、進路講演会などを計画的に実施する。	5教科の問題研究や、選択課題研究や研修プログラム共有のための会議の実施回数の平均値で評価。 4: 年7回以上 3: 年6回以上 2: 年5回以上 1: 年5回未満 学校自己評価アンケート(生徒) ①6「進路相談について、面談などできめ細かく丁寧に指導してくれる。」 肯定的評価の割合(R4 生徒 90.2%) 4: 93%以上 3: 90%以上 2: 80%以上 1: 80%未満	・各教科より、実力考査の到達度に応じた学習教材や学習方法をきめ細かく指示、また、定期的課題でも可能な限り共通課題を精選し、個別最適な選択課題を多く組み入れるなど個別最適な学びを継続的に支援している。さらに、ICT教材の有効活用として各年次とも年2回のスタディサプリ到達度テストを実施、現在その結果をもとに2回目の運動課題の配信を準備している。 ・教科内で定期的な会議を開催し、実力考査の共同作問やその結果分析を行っている。出題分野の偏りもあるため単回の試験と外部模試との相関は、未だ十分ではないが、回を重ねることにより精度の向上を図る予定である(実力作問、結果分析、入試問題研究にかけた教科会議の回数、国3回、数4回、英5回。地歴8回、理8回) ・各年次進路カレンダーを活用し、進路指導プログラムに基づいた計画的な進路指導を実践している。また、進路だよりを計画的に発行(1年7回、2年5回、3年9回)し、タイムリーな情報発信と啓発活動を継続中である。 ・保護者対象進路説明会: 3年次5月(対面)、1・2年次は10月(WEB)開催予定。生徒対象進路講演会: 1年次5月(ベネッセ岩城氏)、2年次6月(リクルート山内氏)、3年次6月(北九州予備校岩崎氏)を計画実施。 ・8月、2・3年次ブロック大志望者対象に外部講師(高予備)による特別講座を実施、意識の向上を図った。年度末にも同様の企画を計画中である。	B	・各教科と連携し、生徒個々の特性や学習進度などに応じて基礎的・基本的な知識技能の確実な習得をめざす「指導の個別化」と、一人ひとりの興味・関心に応じて学習活動や学習課題に取り組む機会を提供する「学習の個性化」を進め、生徒の「個別最適な学び」の実現を支援した。特に、ICT教材の有意な活用は、生徒の主体的な学習の一助となり、基礎の定着や研究意欲の喚起に結びついている。 ・各教科に大学の個別試験に対応する力や新しい学力(知識活用、思考判断、知識創造)を測ることのできる実力考査の共同作問とその分析を依頼、また、そのための入試問題研究を奨励した。結果として3年次の実力0回(2～4回考査の平均点)と外部模試10月(偏差値)との相関は、いずれの教科においても相関係数が70%を上回り、高い精度で学力を測ることができる指標が作成できた。実力の作問、結果分析、入試問題研究にかけた教科会議の回数は、国5回、数11回、英12回、地歴公民8回、理32回(1月末現在)となっている。 平均13.6回 達成基準4 学校自己評価アンケート(R5肯定的評価) ①6 生徒 91.7% 達成基準3 ・3年前48期生1年次のスタート時に策定し、指導の実践とその検証により修正を重ねてきた「高校3年間を見通した進路指導計画」や「学習指導のスタンダード」などの進路マニュアルは、完成年度を迎え、生徒の興味、関心、意欲を高め、志望形成とその先の学びに繋がる有効なシステムとなっている。これらのマニュアルに基づいた進路指導によって、学校自己評価アンケート「進路相談について、面談などできめ細かく丁寧に指導してくれる。」の肯定的評価は91.7%(R4+1.5%)と改善した。(進路だよりの発行。(1年8回、2年10回、3年19回／1月末現在)) ・難関大指導は、校内での計画的・継続的な指導に加えて、予備校講師による特別講座や講演会、難関大に通う卒業生との座談会など外部人材の有効活用も進め、さらなる充実を図っている。	A	【課題】 個別最適な学びの推進と、教科間での課題のレベルや量を調整するなどのきめ細やかで丁寧な指導により、自律した学習者として成長し、主体的に自らの課題に向き合う生徒が増えている。一方で、課題量の減少＝学習時間の減少、指示されなければやらない(やれない)受動的な学習から脱却できない生徒も未だ多い。家庭での学習状況は十分であるとの問いに対する評価は生徒55.2%(R4+2.1%)保護者53.2%(同+1.7)とわずかに回復したものの依然として低い状態が続いている。新型コロナの影響もあり家庭での学習習慣の定着状況にも二極化が見られる。 【方策】 上位層は、志高く自ら課題を発見し解決しようする積極的な姿勢が育っているので更なる指導の充実を図っていく。中下位層には宿題や課題には取り組むが、予習型の学習はできない生徒と、最低限のやるべきことにも取り組めていない生徒がいる。個々の状況を見極め、より丁寧な指導を図り、学びの意欲や自己肯定感を高めていく。 また、再編された系統的なキャリア教育プログラムの3カ年の総括を行い、次年度に向けてプログラムの一部修正などの改善を図る。	
	探究課	・年間2回の授業公開期間を設定して教員相互の授業公開・授業参観を推進し、教科指導力向上を目指す。 ・各教科で生徒に身につけさせたい資質能力を伸ばすためのテーマを設定して研究授業を行う。その際、外部講師を招聘し、指導・助言を受ける。 ・課題研究等の探究活動が進路設計につながっていることを生徒に意識させ、指導方法(入門期の指導、成果の発表)をより一層深化させる。	学校自己評価アンケート ①「教科会議や校内外の授業見学などを通じて授業改善を進めている。」(教職員) 肯定的評価の割合(R4 90.6%) 4: 95%以上 3: 90%以上 2: 80%以上 1: 80%未満 ②「総合的な探究の時間やLHR等が自らの進路設計に結びついている。」(生徒) 肯定的評価の割合(R4 78.1%) 4: 85%以上 3: 80%以上 2: 75%以上 1: 75%未満	・第1回授業公開期間中の互見授業回数 平均2.4回(事後フォーム報告回答数21)。第2回授業公開期間前には早めに周知し、互見授業がより活発に行われるようにする。 ・各教科で全体テーマ「読解力」の育成に基づいて研究テーマを設定して講師の決定・依頼に取りかかっている。 ・1年次の課題研究入門期の指導については、テキストを選定し、課題研究の基本的な考え方と手順を示す準備を進めている。2年生については課題研究中間発表で外部アドバイザーによる指導・助言を受ける機会を設定し、12月の課題研究発表会に向けて内容をより深めていく計画である。	B	学校自己評価アンケート ①「教科会議や校内外の授業見学などを通じて授業改善を進めている。」(教職員) 肯定的評価の割合 77.2%(R4 90.6%) 達成基準1 ・昨年度から始めた研究授業への取組は少しずつ進んでいると思われるが、授業公開期間の互見授業の活性化が課題であると考えられる。 ②「総合的な探究の時間やLHR等が自らの進路設計に結びついている。」(生徒) 肯定的評価の割合 84.5%(R4 78.1%) 達成基準3 1年次 88.7% 2年次 83.2% 3年次 81.3% ・探究課年次担当と年次主任、副主任が連携を取り、年次集会、LHR等の機会を活用して生徒対象に進路設定、進路実現を見据えて講話、指導を行うことができた。 ・次年度以降の指導に活用できるように、ポスター発表後にフォームによる生徒アンケートを実施し、集約した。	B	【課題】 ・授業改善に向けた取組の推進 ・校外での成果発表に向けての指導 【方策】 ・授業公開期間の互見授業活性化 ・生徒授業アンケートの改訂 ・全体研究テーマの共通認識 ・課題探究入門期指導の一層の充実 ・各種発表会等の周知	

本年度の具体的な学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策(教育活動)	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合評価	本年度の課題と次年度への方策	総合評価
1 個に応じた多様な学習指導とキャリア教育計画に基づく進路指導	1 年 次	生徒個々の特性・能力に応じた助言をするため、面談する機会を積極的にに行い、Start-upProgramなどの行事や授業、集会を通して、将来の進路について具体的に考えられるようにする。 ＜具体的方策＞ ・年間5回担任との面談 ・個の進路希望に応じた情報提供・体験行事への勧誘	学校自己評価アンケート(生徒) ①7「総合的な探究の時間やLHR等が自らの進路設計に結びついている。」 肯定的評価の割合(R4 生徒 78.1%) 4:86%以上 3:80%以上 2:75%以上 1:75%未満	・担任との個人面談も順調に進んでいる。 ・進路希望に応じた情報や体験行事についての情報も積極的に発信している。コロナが5類相当となったことで活動が再開される中で、生徒たちは情報提供を元に、各事業への参加を進んで行っている。医療体験を中心に参加が積極的だった。	B	学校自己評価アンケート(生徒) ①7「総合的な探究の時間やLHR等が自らの進路設計に結びついている。」肯定的評価の割合(生徒 88.7%) 達成基準4 数値目標を達成し、生徒たちの積極的な行事への参加がみられた点で良い傾向が見られた。	A	【課題】 一人一人の進路意識や学習に対する意識が低い。 【方策】 ・両担任が協力し、情報共有しながら面談を実施することで、一人一人の置かれた状況を理解・把握する。 ・進路意識を高めるため、情報提供し、生徒自身が実際に職業体験や大学訪問などに積極的に参加するよう促す。	
	2 年 次	生徒個々の特性・能力に応じた助言をするため、面談する機会を多く取る。また、進路指導と連携した探究活動を進める。 ＜具体的方策＞ ・年間5回担任との面談 ・教科面談でのアドバイス ・難関大志望者への集会や講座、教科面談 ・課題研究による探究活動 ・進路カレンダーに沿った進路学習 ・外部講師や卒業生などと接する	学校自己評価アンケート(生徒) ①3「先生は、普段からよく生徒を見て適切な助言をしてくれる」 ②5「先生は、生徒の学力が伸びるように授業改善に努めるなど、様々な教育活動に取り組んでいる」 ③6「進路相談について、面談などできめ細かく丁寧に指導してくれる」 ④7「総合的な探究の時間やLHR等が自らの進路設計に結びついている。」 肯定的評価の割合の平均(R4 生徒 86.2%) 4:91%以上 3:87%以上 2:83%以上 1:83%未満	・面談を3回(4月、6月、9月)実施し、生徒個々の学習状況、興味関心、進路志望の把握に努めている。また、教科等で悩みがある生徒には随時面談を行っている。 ・定期考査前には質問教室を計画した。また、今年度より「ロッキーロード」と呼ぶ難関大志望者への個別指導を3教科を中心にスタートした。今後軌道に乗せたい。さらに志望者の多い岡山大学や国公立大学に向け、志望者を対象にした集会を開き、意欲を喚起したい。切磋琢磨する集団作りを行う。 ・進路とキャリア学習を連携させ、2学期のポスターセッションに向けおおむね順調に進んでいる。本年度は中間発表に卒業生がアドバイザーとしての参加が計画され、研究が深まることが期待される。 ・進路カレンダーに沿った、進路・キャリア教育の計画を進行している。また、進路講演会で外部講師の話を聞き、進路学習に役立てている。	B	学校自己評価アンケート(R5肯定的評価) ①3 生徒(2年次)83.9% ②5 生徒(2年次)84.6% ③6 生徒(2年次)88.1% ④7 生徒(2年次)83.2% これより肯定的評価の割合の平均は85.0% 達成基準2 ・中間発表で卒業生がアドバイスをしてくれたが、アンケート時がポスターセッションの前であったことが④の数字がやや低い原因であると思われる。 ・個々の能力や特性に応じた課題を考えてきたにもかかわらず、家庭での学習時間が185分とまだまだ十分とはいえない。自主的に学習する習慣をつけさせるよう方策を考えたい。	B	【課題】 ・家庭での学習時間が185分であり、十分満足いくレベルではない。 【方策】 ・自主的に学習する必要性を学年、もしくはクラス単位で話す。また、各教科からのアドバイス、授業のあり方について考える。また、勉強時間が少ない生徒に対しては、個別に話をして、勉強へのきっかけを作るようにする。	
	3 年 次	生徒個々の進路実現のため、年次団(クラス間)で意思統一し、教科指導と連携した、一貫性のある進路指導を推進する。 ＜具体的方策＞ ①年間進路カレンダーに沿った系統的な進路指導 ②定期的な(必要に応じて速やかな)面談 ③クラス間情報共有のための「担任会議」 ④学校推薦型・総合型選抜入試へ向けた方策検討・実施 ⑤生徒の学力向上につながる授業改善、個別教科指導 ⑥授業外での自律学習の促進	学校自己評価アンケート(生徒) ① 6「進路相談について、面談などできめ細かく丁寧に指導してくれる」 肯定的評価の割合(R4 48期2年次 88.6%) 4:93%以上 3:89%以上 2:85%以上 1:85%未満 ② 8「自分の家庭での学習状況は十分である。(3年次目安・5時間)」 肯定的評価の割合(R4 48期2年次 37.7%) 4:60%以上 3:50%以上 2:40%以上 1:40%未満	・年度当初(4月)、進路検討会前(6月)の定期面談はもちろん、必要に応じて速やかに進路面談を行ってきた。進路志望が明確になり、学習へのモチベーションとなっている生徒が増えた。 ・6月には学校推薦型・総合選抜型への出願希望者一覧を作成し、クラス間の情報共有を行った。また希望者集会を実施し、熟考の上での出願を促している。生徒一人一人の個性や長所を見極めて出願し、合格者率を高めたい。 ・放課後の自習室利用や授業外での教員への質問など、自主的に、自律的に自らの課題に取り組む姿が定着しつつある。夏休みに「長時間耐久学習」を4日間実施し、平均で100名以上の参加者があり、それも自律学習のよいきっかけになった。	B	学校自己評価アンケート(R5肯定的評価) ①6 生徒(3年次)94.8% 達成基準4 ②8 生徒 (3年次)79.8% 達成基準4 上記2つの評価基準では、ともに達成基準4を実現できた。①については2年次と比べて5%以上の上昇、②については2年次と比べて40%以上の上昇となった。担任が行う定期的な進路面談に加え、必要に応じた追加の担任面談・教科面談で生徒の学習へのモチベーションを上げることができた。また、その表れとして学習習慣が身に付き、長時間の家庭学習を行う生徒が増えた。	A	【課題】 家庭での学習時間については、「当たり前のレベルを上げる」という年次のモットーのもと、3年次こそ授業の取り組みを大切にすることができた。ただし、その意識には個人差があり、できていない生徒もまだまだたくさんいた。 【方策】 統一的に課す課題量を減らし、層別選択課題など個別最適化をさらに進め、進路希望と上手くマッチングさせて、生徒の自主的な学習に持っていくようにしたい。また、改めて家庭での勉強方法の指導を行うべきである。また、勉強をあきらめかけている生徒に個別のケアを行い、勉強へのきっかけを作る具体的な助言を行う。習熟度別クラスの標準グループに「学び直し」の機会を提供する。	

本年度の具体的な学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策(教育活動)	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合評価	本年度の課題と次年度への方策	総合評価
2 他者との豊かなつながりと自律性を育む生活指導	生徒課	・M-PRIDE手帳を活用したタイムマネジメント能力を伸長するため、手帳活用例を紹介するなど啓発にとりくむ。 〈具体的方策〉「M-PRIDE手帳だより」の発行(活用例の紹介)、縮小版行事予定の配布など ・交通ルール遵守・マナー向上の意識を高め、交通事故を防止する。 〈具体的方策〉生徒・教員・保護者による交通査察、学校周辺の危険箇所マップ制作 ・教職員研修などを通じて、不適応症状とその要因に対する知見を深める。 〈具体的方策〉教職員研修の実施、生徒情報共有の強化・深化	①学校自己評価アンケート(生徒)「M-PRIDE手帳を活用してスケジュール管理や目標設定等を行っている」 R4:37.6% 4:43%以上 3:38%以上 2:33%以上 1:30%未満 ②交通事故件数 R4:14件 4:10件以下 3:14件以下 2:19件以下 1:20件以上 ③不適応症状とその要因に対する知見を深めるための教職員研修の回数 R4:1回 4:3回 3:2回 2:1回 1:0回	・M-PRIDE手帳の活用については手帳に貼れる縮小版行事予定を1学期(4月)・2学期(7月)分を配布した。「M-PRIDE通信」を1回発行した。個人や年次の使用の仕方を取材し、具体的な活用事例を集約中である。生徒がスケジュール管理に役立てることができるよう今後「M-PRiDE 通信」で発信する。 ・9月14日現在の交通事故件(報告)は7件である。中間期としては昨年度と同じペースであり、今後もルール遵守、マナー向上にむけて啓発を継続することにより事故防止につとめる。学校周辺の危険箇所マップについては、後期交通委員会の取り組みとする予定。 ・各年次とも、不適応症状に対する初動と継続的な働きかけが充実してきた。教員向け教育相談研修会を、本校スクールカウンセラーを講師に10月に実施予定である。ミニケーススタディも計画中である。不登校等の学校不適応状態に関わる知見を共有する。	B	①学校自己評価アンケート(生徒)「M-PRIDE手帳を活用してスケジュール管理や目標設定等を行っている」 R5結果:37.6%(R4:37.6%) 達成基準2 「M-PRIDE通信」は2回目以降発行できなかった。使用好例の掘り起こしが不十分であった。自己評価アンケートの結果は昨年度と同程度であり、積極的に働きかけを行うことで利用は増加すると考える。 ②1月24日現在の交通事故件数(報告)は16件であり、昨年同時期を上回った。 達成基準2 事故後の対応を誤る例(警察への通報がない、など)があり、指導の徹底が必要である。 登下校時の「危険マップ」は、新入生に配布できるものを作成中である。 ③不適応症状とその要因に対する知見を深めるための教職員研修の回数 R5結果:1回(R4:1回) 達成基準2 「働き方改革」による業務軽減努力もあり、教職員全体の研修として計画することが困難であった。具体的事例に対応するための情報共有は徹底されており、その点で知識・経験の蓄積は実現できているものと考ええる。	B	【課題】 ①自主的自律的な活動の活性化について、生徒課全教職員で指導の方向性を理解し実践しているか。生徒会活動を主に担当する生徒課内の教員だけでは、学校全体の目標を達成することはできない。 ②安全衛生、福利厚生 の充実に関する業務に対する理解と積極的な参画。安全で快適な教育環境を作るための、教職員及び生徒の意識向上。 ③学習や部活動、課題への取り組み以外で生徒を肯定的にとらえるための機会や資源が不足している。 【方策】 ①③生徒の発達段階のとらえ方や、育てたい・身につけさせたい(身につけたい)力などについて、教職員・保護者(・生徒)などが広く意見交換し、共有する機会・場を設ける。また、実践に役立つ研修を計画し、実施する。 ②旧生徒課・旧管理厚生課の業務の整理と精選、機能的な分担をさらに進める。	B
	1年次	生徒が、自分と他人の関係を大切にし、自らが尊重されていると思えるようにするために年次集会やLHR各種活動で生徒の取組を取り上げる。	学校自己評価アンケート(生徒) ①2「倉敷南高校に入学してよかったと思う」 ②22「本校には1人ひとりが尊重され、まわりから受け入れられていると感じられる雰囲気がある」 二つの肯定的評価の割合の平均(R4 生徒 88.7%) 4:90%以上 3:85%以上 2:80%以上 1:80%未満	生徒同士がお互いの存在を意識してはいるが、自分の意見を強く打ち出したり、行動を起こすといった積極性は見られない状況であったが、葦岡祭では生徒から展示のPR動画作成の発案があり、その意見を取り上げ、年次全体での取組みとした。 葦岡祭を契機として、人間関係の深まりも見えている。	B	学校自己評価アンケート(生徒) ①2「倉敷南高校に入学してよかったと思う」 ②22「本校には1人ひとりが尊重され、まわりから受け入れられていると感じられる雰囲気がある」 二つの肯定的評価の割合の平均(生徒 85.1%)達成基準3 2「本校には1人ひとりが尊重され、まわりから受け入れられていると感じられる雰囲気がある」の生徒評価が82.7%と例年に比べ少し低い傾向が見られる。人間関係がうまく築けず、孤立感を感じる生徒がいることを意識し、クラスメートや教師からの働きかけが必要である。	A	【課題】 クラスメートや教員との人間関係づくりへの後押しが必要である。コロナ禍の中で中学校生活を送っていた生徒の自己肯定感を高める方策をとる必要がある。 【方策】 葦岡祭やLHRなどの活動では、各々の役割を果たし互いに良い方向性が見られたが、自己肯定感を高めるため継続した生徒への声かけ等を増やしていく。	
	2年次	生徒が、自分と他人とのあり方について自分事として考え、自らが尊重されていると思えるようにするために年次集会や年次通信等で活動や取組みを取り上げる。 〈具体的方策〉 ・年次集会等の振り返り ・表彰する機会の創出	学校自己評価アンケート(生徒) ①2「倉敷南高校に入学してよかったと思う」 ②22「本校には1人ひとりが尊重され、まわりから受け入れられていると感じられる雰囲気がある」 二つの肯定的評価の割合の平均(R4 生徒 87.7%) 4:90%以上 3:85%以上 2:80%以上 1:80%未満	・年次集会で、本を紹介し、自分と他人のあり方について講話を行っている。また、各クラスで振り返りを行うことで、より自分事として考えが深まる機会を作っている。 ・クラス目標を発表させたり、英単語テストで表彰したりして、取組を取り上げるにより、自らが尊重されているという雰囲気を高めている。	B	学校自己評価アンケート(R5肯定的評価) ①2 生徒(2年次)84.9% ②22 生徒(2年次)83.9% これより肯定的評価の割合の平均は84.4% 達成基準2 ・年次集会で話をして、振り返りも行っているが、こちらからの一方的なものであり、全員が振り返りをしているとは言いがたい。 ・自らが尊重されているという雰囲気は高まってきている。入試などで不安に思う生徒が増えることが予想されるので、生徒が自信をつけていくよう方策を考えたい。	B	【課題】 ・自分と他人とのあり方について話をしてきたが、まだまだ自分事として考えられない生徒が見受けられる。また自己肯定感が低い生徒がいる。最終学年を迎えるにあたり、今後受験や進路について不安や悩みを抱える生徒の増加が予想される。 【方策】 ・生徒同士の話し合いや、生徒代表者の発言などから集会の話を振り返る方法を工夫する。話を自分事としてとらえるようにする。 ・様々な活動で活躍の場を増やし、その活躍を取上げることで自己肯定感を高める。また、クラスだけでなく教科等の面談など、年次教員全体で声かけをし、自信を持たせる。	
	3年次	自由に思考・発想できる雰囲気を作り、互いに多様性を尊重する精神を育む。仲間と協働し、新たなことに挑戦する精神を育む。 〈具体的方策〉 ・年次集会等で継続的に「多様性の尊重」講話 ・自由で柔軟な進路選択・実現の支援 ・葦岡祭等での生徒の発想・工夫を尊重 ・新たに挑戦する、仲間との協働する機会創出 ・表彰する(褒める)場面の増加	学校自己評価アンケート(生徒) ① 2「倉敷南高校に入学して良かったと思う」 肯定的評価の割合(R4 48期2年次 86.5%) 4:90%以上 3:85%以上 2:80%以上 1:80%未満 ② 22「本校には1人ひとりが尊重され、周りから受け入れられていると感じられる雰囲気がある」 肯定的評価の割合(R4 48期2年次 87.2%) 4:90%以上 3:85%以上 2:80%以上 1:80%未満	・面談を通し、就職や専門学校も含め、生徒が幅広い進路選択を希望していることがわかり、柔軟かつ丁寧な対応ができている。 ・葦岡祭では、動き出しまで時間はかかったものの、生徒の発案や工夫を尊重し、新たに挑戦する機会の創出に努めた。まだまだ粗削りだが、自主性の芽が生まれつつあることが喜ばしい。途中、人間関係のもつれが一部であったが、担任の配慮で修復でき、最終的には年次全体が仲間と協働する喜びを感じられたようである。 ・教員と生徒のリーダーたちが何度も話をして、生徒と教員の意識の足並みがそろっていたことは、今回の葦岡祭成功の鍵となった。	B	学校自己評価アンケート(R5肯定的評価) ①2 生徒(3年次)89.3% 達成基準3 ②22 生徒 (3年次)89.7% 達成基準3 上記2つの評価基準では、ともに達成基準4に近い3という結果になった。 ①②ともに2年次と比べて2～3%以上の上昇となった。過去2年間と異なり、制限のない葦岡祭をリーダー的な年次としてできた満足感を得られたのが大きい。そこで得られた自己肯定感の影響か、その後の諸活動でも、自主自律的な取り組みが見られている。	A	【課題】 葦岡祭での達成感を得られたが、それ以外の新たに挑戦する機会を3年次で創出できなかった。葦岡祭の流れを、受験勉強に上手くつなげていくのが精一杯であった。 【方策】 葦岡祭では、普段授業では見られない生徒の活躍が見て取れたが、それもあくまで一部の生徒に限定的であった。1、2年次よりは少なくなるものの、年次行事等を設定して、新たなことに挑戦する、仲間と共に協働する機会を設定するべきである。そうすれば、葦岡祭との相乗効果で、さらに3年次生の自主自律の精神が確立するであろう。	

本年度の具体的な学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策(教育活動)	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合評価	本年度の課題と次年度への方策	総合評価
3 創立50周年事業と開かれた学校づくりの推進	総務課	・時宜を得た情報発信と情報収集 情報発信と情報収集を柱とした戦略的な中学校や塾訪問の実施し、充実したPTA活動の取組による保護者との共通理解と信頼関係を構築する。 ・保護者・地域・関係機関等との連携 地域のメディアに計画的に情報を提供し、保護者が参加できる行事を一覧表にして公開する。	・ホームページのアクセス数の県立高校内の順位(R4末、3位) 4:2位以内 3:3位以内 2:5位以内 1:6位以下	・時宜を得たブログ記事104本をこれまでに投稿して情報発信に努めた。葦岡祭ではケーブルテレビの取材を受けて放映された。今後は特徴のある行事等について、コロナ以前のように頻繁に報道機関にお知らせをする。 ・PTA活動では総会や学校祭で以前のような取り組みを再開しつつある。今後は、Web上のお知らせやブログ、メール配信などを効果的に活用して、保護者の来校を促す。 ・近隣塾訪問7校、4校の説明会参加 ホームページアクセス数 県内4位(4月～8月)	B	・12月末までの本校ホームページのアクセス数が268万回を超えて県内第4位となった。 達成基準2 ・県委託業者による岡山県立高校紹介動画の撮影チームが来校し、5分間の紹介動画を制作した。進行台本は総務課で作成し、広報委員会や放送無線部生徒から出演者を公募し6人が出演した。 ・地域のメディアに対して4回情報を提供して取材を受けた。 ・PTA活動では、葦岡祭での飲食物バザーが再開され、充実したPTA活動の取組ができた。特に今年度は高P連中四国大会での発表や実行委員会分担業務と本校創立50周年記念式典などの行事を通して、保護者・教職員との共通理解が進んだ。	B	【課題】 ・広報資料の配布はできたが、戦略的な中学校や学習塾の訪問が不十分であった。 ・保護者が参加できる行事が4年前の水準に戻ることがなく、一覧表にして公開することは取り止めた。今後の状況を判断しながら案内する必要がある。 【方策】 ・「南高ブログ」は12月末までに114本の記事を投稿し、県立高校約60校中36位であった。どの学校もブログ投稿を高頻度で行っているが、本校のホームページのアクセス数から判断してこの程度が適正であると考える。機をとらえて、本校生徒の振り返りと自己肯定感を高めることができる内容になうよう注力し、中学生や保護者にも魅力を伝える。	A
	探究課	・課題研究、ラーニングカフェなどの探究活動において、同窓生、地域、関係機関等と連携をとり、講師派遣を依頼する。	・2年次課題研究の外部講師として、各研究分野で本校同窓生である大学生・大学院生を中心に指導・助言を依頼する。(新規企画 各分野年間1人以上)	次の行事では関係機関に協力を依頼し、外部講師に指導・助言をいただいた。 1年次:ラーニングカフェ 2年次:事業所訪問 3年次:面接ガイダンス 岡山大学大学院生出身校訪問 また、SDGs講演会(12月)、課題研究中間発表(10月)、課題研究発表会(12月)については講師依頼中である。本年度は課題研究中間発表に卒業生(岡山大学院生・岡大生)をアドバイザーとしての訪問を依頼している。生徒の研究を深める取組としたい。	B	・2年次課題研究中間発表会に本校同窓生である大学生、大学院生12名にアドバイザーとして来校してもらった。2年次生、卒業生ともに好評であった。次年度以降も継続したい。	A	【課題】 卒業生にアドバイザーを依頼するための持続可能なシステムの構築(依頼時期・回数等の検討) 【方策】 協力してくれた学生に後輩を紹介してもらおう。 在校生が卒業する前に依頼しておく。	
	委員会	・明確なスケジュールリングと役割分担により、業務の平準化をはかる。 ・週時程内の委員会を活用し、記念事業の進捗状況を共有し、相互に支援する。 ・PTAや同窓会・生徒会との緊密な連携をする。	事後アンケートの肯定的評価を用いる。	おおむねスケジュール通りに進行している。今後学校全体での役割分担により当日までの準備態勢を整える。生徒は葦岡祭をはじめとする冠行事により、50周年事業への関心も高まっている。	B	生徒事後アンケート 「創立50周年記念事業を契機として倉敷南高校の50年の歴史を意識することができた」肯定的評価 79.6% 「創立50周年事業を契機として生徒会、同窓会、PTAや地域とのつながりを以前より感じることができた」肯定的評価 72.9% 同窓会やPTAと連携をとり、滞りなく事業を実施することができた。生徒会は事業の実施にあたり、過去2年にも制服ボロシャツの制定、懸垂幕スローガンの選定等を実施してきた。本年度は式典を盛り上げるべく、中庭での校歌練習など積極的に関わってきた。	A	【課題】 次回が10年後であり、情報伝達に課題がある。また、コロナの影響や時代の変遷によって式典のありかたそのものの変化が予想される。 【方策】 次期60周年記念事業に向けての資料、及び今期の反省を実行委員会で共有した。資料の保管等についても場所を決めて、校内でも共有する。	

